

子育て環境の向上で人口減少を抑制 目標は《生活快適都市》の構築

初めて迎える人口漸減時代への布石

今回訪問させていただいた甲斐市は、平成16年9月1日、旧中巨摩郡竜王町、同敷島町、旧北巨摩郡双葉町の3町の合併により、新市としてのスタートを切った。

県都・甲府市と韮崎市、南アルプス市、北杜市、昭和町に接し、南北に細長く延びる形で展開する市域(約72km²)の西側には、一級河川・釜無川(富士川)がある。甲斐市の市街地は、主にこの釜無川沿いの平野部に広がっている。日本三大急流の一つともされる釜無川の源流は、長野県・山梨県の県境を成す南アルプス・鋸岳の谷合いから発しており、釜無川はそこから幾つもの川と合流しながら南下し、途中、笛吹川と合流する地点(山梨県南巨摩郡富士川町付近)で、名称を「富士川」へと変える。

釜無川は暴れ川としても有名で、歴史上幾

度となく氾濫を繰り返し、甲府盆地全体に洪水被害をもたらしてきた。戦国最強の武将とされる武田信玄は甲府盆地を洪水から守り、安定した土地利用、地域開発を図るため、甲斐の国主となつてすぐに釜無川の治水に着手し、20年近くもの歳月を掛けて、斬新な工法による一大事業を完成させたといわれている。

釜無川が甲斐市に面している部分の土手は、「信玄堤」として広く知られる。武田信玄は氾濫の要因となつていた御勅使川(甲斐市・竜王地区で釜無川と合流)の流れを変え、堤防を何重にも張り巡らした。さらに流れの中に、丸太で三角錐を組み、そこに石を詰めた蛇籠^{じやかく}をのせた「聖牛^{せいぎう}」を設置して、水の勢いを弱める工夫や、漂流物の拡散を防ぐ方策を施した。まさに釜無川の治水こそ、甲斐の国を治める要諦だったのだ。

この信玄堤の堅牢さは、堤が完成した1560年前後から1896(明治29)年まで約330年間、一度も決壊しなかったという

ほさか たけし
保坂 武長
甲斐市長

歴史的事実が如実に物語っている。

その後、富士川水運(物流・人流)は、甲州(山梨)と駿州(静岡)を結び、大いにぎわった。

今日、信玄堤の中心部は公園化され、市民や観光客の憩いの場となっているが、そこを歩くだけで信玄堤のスケールの大きさ、創意工夫の積み重ねが、改めて実感されてくる。





釜無川の防水祈願として9世紀に始まった神事が起源といわれる「おみゆきさん」

さて前述のように、甲斐市の市街地は、この信玄堤の周辺に広がる盆地（甲府盆地）特有の平坦な地域一帯に展開している。だが市域の



信玄堤からみる釜無川の流れ



急流に対抗するべく信玄時代に考案された「聖牛」

地勢の様相は多様だ。例えば北部には昇仙峡や茅ヶ岳に至る山岳地帯があり、そのすそ野には地場産業の代表であるワインを産するワイナリー、ブドウや桃など各種の特産品を栽培する果樹園、米作を中心とする田園地帯などの里山風景が見られる。そうした無垢の自然と人の手の入った里山、適度な都市的集積などが共生する環境に、県都・甲府市に隣接する至便な地理的条件が加わり、甲斐市エリアは特に平成以降、人口を順調に伸ばさせてきた。

平成27年10月に策定した甲斐市人口ビジョンによると、合併後の平成22年国勢調査時との比較では人口増となっており、平成27年は7万4874人（住民基本台帳）となった。将来的には漸減傾向と推計しているが、現在もおおむね横ばいで微増してい

る。ちなみに山梨県内全市町村（13市8町5村）のうち、平成22年度から27年度の国勢調査の間に人口が増加している自治体は、市では甲斐市のみだ（ほか1町1村）。甲斐市における位置的環境や住環境、さらに人口の推移の過程など多彩な要素を総合してみると、甲斐市は人口動向に関して、山梨県内では一種のアドバンテージがあるともいえそうだ。

「人口ビジョンでは、平成37（2025）年度ぐらいまで、甲斐市の人口は7万4000人台を維持すると見えています。さすがにそこからは緩やかな減少が進捗していくでしょうが、日本全体の人口が約3割減になると推計され



甲斐市には3つのワイナリーが立地（写真はシャトレゼ ペルフォーレ ワイナリー）



ネウボラ推進事業「にこにこママルーム」



ている平成72(2060)年度においても、現在の85%程度に当たる、約6万4000人程度は維持されるのではないかと推計しています」
 そう語る保坂武・甲斐市長は、課題として、「①産業振興と雇用環境の改善／②若年層の転出者の引き留め策と回帰／③子育て環境の充実／④甲斐市の住みやすさについてのアピール」を挙げる。そうした観点から注目されるのは、この②～④に幅広くかかわっている「甲斐市版ネウボラ推進事業」だ。

甲斐市版ネウボラ推進事業の特色

いわゆる「ネウボラ事業」は現在、全国150以上の自治体が何らかの形で推進していると考えられる。ネウボラはフィンランド語で、「相談の場」を意味する。妊娠前から出産を経て子育て期の子どもを持つ家族を対象にした切れ目のない子育て支援を行うという福祉思想で、その根幹は徹底した「相談活動」に置かれている。

『ネウボラ フィンランドの出産・子育て支援』(高橋睦子著・かもがわ出版)によれば、妊娠期が対象の「出産ネウボラ」と就学までが対象の「子どもネウボラ」があり、フィンランドでは妊婦の98%以上、未就学児の99%以上が、同制度を活用しているという。

「甲斐市ではこの取組みを、『人口減対策』の最重要な施策の一つとして、平成27年度から始めました。保健師が中心になっている



安藤忠雄設計のJR竜王駅 南北駅前広場を彩るイルミネーション

『甲斐市子育て世代包括支援センター』(子育て健康部・健康増進課)を拠点に、市内の医療機関、保健所、児童相談所、子育て支援センターやファミサポ、保育園・幼稚園、小学校、各種の住民組織などを横断的に結んだ環境の中で、妊娠・出産から子育て期の子どもとそこご家族を、切れ目なく支援することにより、甲斐市における出産・子育て環境を、包括的にボトムアップしていこうとする取り組みです。

とりわけ甲斐市の特徴的な取組みではないかと自負しておりますのは、甲斐市と包括連携協定を結んでいる山梨大学(国立大学法人)のご協力のもとに、産婦人科の女医さんを誘

致し、新たに産婦人科クリニックを立ち上げたことです」(保坂市長)

甲斐市はもともと、市内に各種の専門クリニックが60以上も揃っているほか、山梨県立中央病院(三次救急指定・甲府市)や山梨大学医学部附属病院(二次救急指定・中央市)など、先端医療を提供する総合病院への交通アクセスも非常に便利な場所に位置している。そういう意味では、まさに県内医療圏の中心的なエリアでありながら、気がかりであったのが、妊産婦が気軽に診療を受けられる産婦人科クリニックの少なさだった。

「クリニックの名称は『このはな産婦人科』といいます。市内・西八幡地区には、さまざまな専門のクリニックが集積した『メディカルタウン』があります。その一角に相談事業などに使えるスペースを備えたクリニックを誘致し、山梨大学大学院産婦人科教室の助教を務めておられた女医さんが開業いたしました。その先生はもともと、県内で開業する意志をお持ちだったそうですが、それならぜひ甲斐市にと(笑)、お願いしたわけです」(保坂市長)

《このはな産婦人科》クリニックには、診療スペースのほかにはネウボラ事業の目玉でもある「産後ケア室」が設けられている。

保健師や助産師が産後うつなどの不安に悩む母親からの相談に乗ったりするなど、「各種の産後ケア」が受けられる。具体的には生後1か月半の親子を対象とする「にこにこマ

マルーム」、生後6か月までの親子が対象の「子育て相談室」などを実施している。

また甲斐市健康増進課では「授乳や発育に関する悩み相談を受けたりすることも重要ですが、特に今は悩みのないお母さんでも赤ちゃんと一緒にここを訪れていただくことで、相談できる場所を知ってもらうこと、また、同じ年代の子どもさんを持つお母さんたちに、交流等の場所として活用してもらうことが重要」との姿勢を明確にしている。さらに健康増進課内に設置された「甲斐市子育て世代包括支援センター」では、保健師が母子保健コーディネーターとして、切れ目のない支援をするためのワンストップサービスの窓口の役割も果たしている。



創甲斐教育の一環として開催されている「甲斐市小中学校音楽祭」



甲斐市のマスコットキャラクター「やはいぬ」

「出産については山梨大学医学部附属病院で行い、『このはな産婦人科』クリニックでは、出産前と出産後のケアを担当していただいております。この連携を中心に市民協働による、まちを挙げての包括支援、考え得る限りのサポートを、子育て中の親子に提供していく体制を整えました。それが甲斐市版ネウボラ推進事業の骨格といえます」(保坂市長)

学校だけに留まらず、 地域とも連携する創甲斐教育

「甲斐市版ネウボラ推進事業」が、数あるネウボラ事業・実施自治体の中でもマスコミなどで取り上げられる例が多いことの背景に

は、女性が住みやすく、安心して子育てができる環境の整備を、単なる子育て支援ととらえていないことが大きいのではなからうか。そこから一步も二歩も踏み込んで、甲斐市では「ネウボラ推進事業」を、全国自治体の最大にして共通の地域課題である人口減少化抑制に向けた施策の、重要基盤と位置付けている。その本気度が一つ一つの事業におのずと、にじみ出ているからではないかと思われる。

その精神は、母子へ切れ目のない支援を旨とする「ネウボラ推進事業」から、今後の甲斐市の教育を推進するための基本指針となる「創甲斐教育推進事業」にも、一貫して引き継がれているように思われる。

『創甲斐教育』は教育基本法に基づく教育振興基本計画として、平成22年度に策定し、平成26年度に見直しを行った「創甲斐教育推進大綱」(平成31年度)を基盤にした、教育全般に関するコンセプトといえます。『甲斐市で育ち、甲斐市を育てる人づくり』を基本理念に、『まちづくりは人づくり 生涯にわたる学びのまち』を旨とするさまざまな取組みを行っています(保坂市長)

創甲斐教育の目標は「学校教育の充実」「家庭・地域・学校の連携強化」「生涯学習・文化活動の推進」「スポーツの振興」「図書館活動の推進」に大別できるが、中でもユニークなのは「生涯学習子ども対象講座」の多彩さだ。

市内各地区に立地する4公民館(竜王北部・竜王南部・敷島・双葉)を舞台に、「J・P・O



山縣神社で開催される大式学問祭

Pでヒップホップ／親子おさかな学校／親子消しゴムはんこ教室／はじめてのキャラ弁づくり／子どもマナー／理科あそび／親子でほうとうづくり／子ども囲碁教室／こども落語／親子でたたこう！信玄太鼓」などなど、多様性にあふれている。

子どもだけで参加する講座、親子で参加できる講座がバランスよく設定されているのも特徴の一つだが、市内の小中学生が大勢参加する文化活動が充実しているのも、地域全体で『子育て』に関与しようとする甲斐市の教育環境を物語っている。

具体的には、年齢別や季節に応じた「おはなし会」(延べ7000人の親子が参加)、「甲斐市小中学校音楽祭」(市内小中学校の児童・



竜王駅前(南口)の山県大式像

生徒が、学級・学年単位、クラブ活動・部活動、サークル活動などの成果を発表)、「子ども書道講座『しゅうじ』」(つておもしろい)市内の小学1年(3年生対象)などの教育イベントの数々だ。

子育ては「人づくり」にして「まちづくり」

「山県大式は郷土が生んだ江戸期の学者で、その著書『柳子新論』において、政治・経済・身分平等など13項目に及ぶ学識の成果が記されています。そのほか、書道のお手本になる書物も著しており、甲斐市ではその遺徳をしのぶとともに顕彰していきたいということから、創甲斐教育推進事業の一環として『山県大式書道展』を実施しています(保坂市長)

平成20年に供用開始された、斬新なデザイ

甲斐市

(山梨県)

市 政 ル ポ



御領の“棚田”と“棚田ろうそく祭り”



ンと構造のJ R中
央線竜王駅(設計・
安藤忠雄)の駅南
口には山県大武の
銅像があり、市内
には山縣神社(大
正10年創建)もあ
る。初詣の折りに
は大武の遺徳にあ
やからうと、受験
生などが大挙して
訪れるという。ま
た昨年には、甲斐
市農業活性化協議

会が遊休農地で作った黄金千貫を原料とする
本格芋焼酎「大武」が「2016春季全国酒類
コンクール本格焼酎・芋焼酎部門」で第1位に
輝いた。そしてさらなるPRとして、甲斐市
在住の世界的ダンサー、田中浪さん出演のテ
レビCMも放映されるなど、山県大武とその
生誕地・甲斐市が大いに発信された。

「ワインの名産地・甲斐市生まれの芋焼酎
というの、なかなかいいでしょう(笑)。こ
れも地域の人々の創意工夫のおかげだし、こ
うした活動もすべて、自然発生的に生まれて
きた生涯学習の一環ではないかと考えていま
す。また生涯学習といえば、かつては高齢者
向けが主流でしたが、小学生から生涯学習を
始める創甲斐教育の成果が将来、どのような
形で結実していくか。私もそれを今から楽し
みに待ちたいと思います」(保坂市長)

新市発足から足かけ13年目を迎えた甲斐市
では、これまでに述べてきた人口減少化抑制
に関する施策だけでなく、市民がより暮らし
やすくなるような、また暮らしをより楽しむ
ことができるような、市民協働による地域活
性化の芽が多彩な形で萌え始めている。

「やほたいも」「甲州ワインビフ」「桑の実
ジャム」「甲斐の本格芋焼酎大武」などの地域
ブランド製品の創出。地域活性化を目的に、
竜王駅魅力発信協議会の「甲斐てき市場」と地
元街おこし推進委員会主催の「朝市」を合体さ
せた「竜王駅前甲斐てき朝市」の開催。市内に
立地する3つのワイナリーを中心に巡る観光

巡回バスの運行。観光ツアールートとして好
評な「甲斐市小さな旅」を実施するなど、数多
くの事業を展開している。また、山梨県内で
初の指定を受けた「バイオマス産業都市」の構
築にも取り組んでいる。

一つ一つ挙げていけばキリもない。だが出
産前から子育て期までの子どもと親を支援す
る甲斐市版ネウボラ推進事業や、子どもの可
能性を広げることを目指す創甲斐教育推進
事業における「甲斐市で育ち、甲斐市を育て
る人づくり」を基盤とするまちづくりの根底
には、どこかあの信玄堤のたたずまいを髣髴
とさせる「何か」が感じられてならない。信玄
の国造りの基本理念として伝わる「人は石垣、
人は城」という、あの名言の響きとともに。

(取材・文＝遠藤隆／取材日平成29年8月18日)



地域活性化を目的に市民協働で開催する「竜王駅前甲斐てき朝市」